漂着、入唐の地から杭州へ

南方コース

空海求法の道2400キロを、静氏の紀行に沿って追体験していこう。

霞浦（赤岸鎮）

空海が漂着した浜

空海が遣唐大使藤原葛野麻呂らと共に、34日間海上を漂った末に漂着した地である。1984年に空海入唐の道追体験が実行されるまで、空海以降1180年間、この浜にきた日本僧はいなかった。

この浜は東海（東シナ海）から卵型に入った湾で、その突き当たりに赤岸村があった。

空海は全長24～25メートルの遣唐船でこの浜に辿り着き、中国の大地を目にしたのである。

初めて訪れたときの鶏の声で起こされたのどかな風景は、2000年代に入って激変した。現代の霞浦県赤岸村は、ホテルも整備され、驚くほどに近代化されている。

福州

空海の書で上陸が許される

空海たちは、45日ほど赤岸に留まったのち、海路で南へ250キロの位置にある福州に向かう。

福州には、当時から大きな港であった馬尾港という港がある。大使藤原葛野麻呂は、この地で大使としての書状を何度も中国側へ提出するが、認められなかった。そこで、書、文章力、語学力に優れた空海に交渉状の作成を依頼。この文章によって遣唐使一行の上陸が認められることとなった。このときの空海の文は、「大使の為に福州の観察使に与える書」として今も残っている（性霊集・巻五）。馬尾港からは、福建省の中央を東西に流れている大河（閩江）を遡って南平に向かう。空海たちが水路と陸路、どちらを辿ったかは定かではないが、唐代の閩江は船による交通が発達していたようである。

南平・建甌・浦城

唐代からの水路を利用

閩江を使い南平に到着すると、そこ

※本記事は『高野山大学選書 第5巻 現代に生きる空海』（小学館スクウェア）の「現代中国に甦る空海」著／静慈圓をもとに構成しています。 ※（★）印がついている写真は、静慈圓氏が団長を務めた「空海ロード巡礼」にて撮影されたものです。写真は巡礼地の一部を紹介したもので、これがすべてではありません。

赤岸鎮の浜

空海漂着の地。804年、遣唐使船に乗った空海は34日間漂流したのち、この浜に漂着した。空海が初めて目にした唐の大陸の風景が残る（★）。

空海紀念堂の空海像

赤岸村に建立された空海紀念堂の空海像。現在、空海ロードには11の空海像があり、多くの中国人巡礼者が祈りを捧げている（★）。

仙霞古道

険しい山脈「仙霞嶺」を通る、唐代からの官道。両脇には山がそびえ、谷の部分に石畳の道が続く。現在も仙霞古道として整備されている（★）。

仙霞関

仙霞古道にある関所。山深いなかに、城壁のような石垣が設置されている。頑丈な石垣のふもとには、「仙霞関」と書かれた石碑が建つ。

武夷山

福建省と江西省にまたがる山脈で、世界遺産にも登録されている景勝地。36の岩山を眺める「九曲渓」や、岩に張りつき育つ「武夷岩茶」が有名。

二十八都鎮

唐代、交通の要衝として栄えた古村。空海ロードの開創を機に、村おこしとして唐代の官道沿いに残されていた建造物が再建された（★）。

開元寺

福州にある開元寺は、549年建立の古刹。唐代には空海のほか、天台宗の円珍大師、インド密教の高僧らが修学に訪れたと伝わっている。

開元寺　空海像

開元寺境内にある空海大師紀念堂に安置されている空海像。開元寺には、空海入唐の地の石碑や修行大師像なども建てられている。扁額は静慈圓書（★）。

静慈圓 南方コース 紀行レポート

2011年 4月8日～14日

に南平の政府、学者たちが研究し探し出した「唐代船着場」がある。そこからは南平市に入る「延寿門」が見える。遣唐使一行も、この門を通り、南平市に入ったのである。

南平は四方を山に囲まれた峡谷のような土地で、ここからは北へ建渓を遡り、建甌、浦城へと進む。遣唐使一行は、この建渓を百葉船という5～6人乗りの船を連ねていったと考えられる。建渓の流れは緩く、百葉船が頻繁に行き来した唐代の光景を彷彿とさせる。この川には現在は中流にダムができている。

建甌でも唐代の船着場が確認されており、そこからは漢代からあるという「通済門」が見えた。遣唐使一行も、この門をくぐり、建甌市街へと足を進めたことになる。

次に目指す地・浦城まで、建甌からはおよそ160キロ。この行程も川であり、遣唐使一行は5日間を要したと考えられる。

浦城の町は2000年以上の歴史を持つ、山に囲まれた壮大な広さの盆地である。福建省と浙江省、江西省がまじわる山間地域にあるが、所属は福建省である。気候は温順で、穀物が豊富にとれる。官道沿いにあり、「古来中国では、戦争時においては、浦城を得た者は勝利し、失った者は敗れる」といわれている。市街には、空海が立ち寄ったと思われる天心勝果禅寺という古刹がある。

浦城から陸路をとり、南方コースの難所、仙霞嶺に入る。

仙霞嶺から杭州へ

空海で甦った古村

浦城から江山市へ出るには、唐代の官道であり、険しい山脈の「仙霞嶺」を越えなければならない。官道沿いには唐代の駅（伝馬のための連絡機関）が30里ごとに置かれている。

福建省から浙江省の境界線を越えるとすぐに、二十八都鎮がある。鎮とは中国の地方都市のことで、官道沿いにあった二十八都鎮は、唐代は繁栄していた。明・清時代も盛んであったが、とんでもない山中にあるため、歴史のなかで次第に忘れられていった。

二十八都鎮の村に入ると、道の両側に古びた民家が続く。

また、かつての繁栄を偲ばせるように、地方学問所「文昌閣」など多くの建築群が残っている。この古い鎮は、空海ロードの開創を機に、官道の道沿いの建築群が唐代の様相に再現され、観光地になっている。

空海によって甦った鎮である二十八都鎮を過ぎると、道はいよいよ山中の仙霞嶺に入る。仙霞嶺の唐代官道は、仙霞古道として約10キロ残る。両側には山がそびえ、谷間に石畳の道が続く。

空海入唐の道は、仙霞嶺をあとにして江郎山を右に見ながら、江山市、杭州へと続く。

空海一行は、江山付近から川で下り、杭州へ出たと考えられる。現代も、雄大でゆったりと流れる川は、船旅がよい。この船旅を終えると、中国八大古都の1つ、杭州に着く。

近代化を遂げた空海ロードの各地

今回、日本人は24名、上海関係の中国人23名、五智山光明王寺関係を中心に台湾・香港の13名が集合した。3台のバスに分かれて一緒に同コースを巡拝する。中国人も白い行衣と輪袈裟の団体である。中国では異様ともいえそうな団体であったが、かえって各地の人民政府、寺院に温かく迎えられた。

飛行機が遅れ、4月8日20時福建省の霞浦赤岸到着（上海で中国国内線に乗り換え）。翌日、赤岸の「空海紀念堂」で法要。手を合わせて、頭を垂れる。日中両国の大師信者に、お大師様も驚かれたであろうが、皆々信仰については素直である。お大師様を崇拝することにおいては、中国人も日本人も変わりはないのだ。赤岸の砂浜で、空海当時を回顧した。

復興なった建善寺を参拝、昼食には現地の「空海研究会」の人たちも加わった。

初めて空海ロードを巡った1984年当時と比べ、霞浦赤岸は、すっかり変わってしまった。湾岸高速道路ができ、上海・杭州・霞浦へ新幹線が走り、高層建築が連立している。

福州市へ移動、途中鼓山涌泉寺に参拝、そして福州開元寺を参拝する。福州市も新しいホテルが連立、豪華なホテルもできていた。今回は福州万達威斯江酒店（WESTIN）へ泊まった。最新のホテルである。部屋のなかも豪華で、日本の一流ホテルと変わらない。

翌早朝、ホテルに用意してもらった弁当を持って空港へ。武夷山空港着。政府の車が迎えにきてくれた。すぐ世界自然遺産の武夷山風景区参観。ここには世界遺産の岩肌を削り、私の漢詩が刻まれている。外国人としては私のものが唯一である。私の漢詩は旧友林宏作先生の作である。林先生の博学は、私の活動をいつも助けている。

武夷山観光の目玉は、九曲渓の筏下りである。九曲渓上流の星村が出発地である。雄偉な岩山の連なる大自然のなかを川の流れに任せて、竹の筏で渓流をゆっくりと下る。まるで別世界の醍醐味である。

世界自然遺産の武夷山風景区に建つ、岩肌を削って刻んだ漢詩碑。

武夷山観光の目玉、九曲渓の筏下りの様子。

今回武夷山で度肝を抜かれた。夕食に参加した私の友人である政府の要人3人が、夕食後には「ナイトショー」を見物するように勧めてくれた。

入場料は200元から1000元と幅があり、階段状の椅子が2000席ある。上段のほうが高い。中国の生活からすれば、この料金は極めて高いが、驚いたことに、ほとんどが中国人によって満席であった。私たちの座るこの2000席が真ん中にあり、2000席が丸ごとそのまま回転するのである。その周囲の大自然が舞台であった。武夷山のウーロン茶をテーマにした1時間半の物語で、我々の席が4回、回転した。その都度、四方で舞台状況が変わっていく。かかわっている団員は、500人だという。見事であった。このような大がかりのステージは、日本にはない。

この舞台、観客が500人以上でないと行われない。しかし1日2回～3回するときもあるという。武夷山は、徹底した政府指導の観光地となっていた。我々の旅行団員のなかには、興奮して眠れなかったという人までいた。

空海ロードが復興した観光地・二十八都鎮

4日目、二十八都鎮見学。

2009年9月16日に私は、「弘法大師空海入唐千二百年記念報恩事業」として、金剛峯寺の協力を得て「二十八都鎮唐代官道の整備」を申し出、江山市と「協議書」の調印式をした。江山市は、古鎮復興として、二十八都鎮の建造物を唐代様式として、古鎮復興を行うと宣言。唐代の官道整備は進められ完成した。

2年前にきたときは、復興工事の最中で、鎮のなかに入れなかった。今回、古鎮は見事に復興した姿で私たちの前に現れた。空海の名のもとに、空海によって復興された古鎮である。

二十八都鎮から険しい山中に入り、唐代の官道は続く。山中の官道には数カ所の関所が残っている。「仙霞関」という関所に行く。これまでは、訪ねてくるのは私たちだけというこの関所に、中国人団体のバスがきていた。この関所も観光として中国人に知られるようになったのだろう。びっくりした。

二十八都鎮の古鎮復興で建造物とともに整備が行われた官道。

江山市人民政府の招待宴夕食に招かれた。市長をはじめ、副市長の毛正彩・陸佩軍の両氏、民族宗教事務局局長の楊有生氏、外事弁公室主任の姜励氏等の接待を受けた。皆々空海によって二十八都鎮が生まれ変わったと空海の恩恵に感謝された。

5日目、江山市にある世界遺産・江郎山をまず訪ねる。むくむくとただ岩山だけがそびえている。この岩山をバックに公園がある。私は、金剛峯寺門前の「枝垂れ櫻」の接ぎ木を3本持ってきた。人民政府の人たちと一緒にこの公園に植樹した。日本の友好の桜が咲くのも、今後の楽しみである。植樹のあと、私たちは巨大な岩山、江郎山山頂を目指した。心に残る登山であった。

孔子75代の孫の一人、孔祥階氏（写真右）と。

江郎山近くにある公園内に、人民政府の人たちと「枝垂れ櫻」の接ぎ木を植樹する様子。

その後、浙江省衢州市南孔子廟に向かった。現在孔子75代の孫の孔祥階氏が住まわれている。廟に隣接した昔ながらの大邸宅である。芝生の庭には、孔雀が放たれていた。この地方の名士である。

孔氏に迎えられ団員はお茶をいただく。孔氏の一挙手一投足は社会に大きく影響するため、外出も海外旅行も好まず、邸宅内にいることが多いらしい。しかし日本訪問のときは高野山にこられた。私は5回目の孔子廟訪問であろうか。愉快に話してくれた。

夕食は孔氏の招待を受けた。5人で出かけた。食卓にはマグロのトロがでてきた。美味であった。最近、マグロのトロの上物は、中国人が買うという。

8番目の世界不思議龍遊石窟を訪れる

6日目、「龍遊石窟」を見学。不思議な石窟である。小さな溜池で釣りをしていた村人が、10キロ余の大青魚を釣った。不思議に思い、1992年6月、4台のポンプで昼夜兼行で17日かけ池の水を抜いてみた。すると、なんと地下から大洞窟が現れたのである。洞窟内のすべての壁は、人間が機械で削ったように掘られていた。しかし魚は1匹もいなかったのだ。

この一帯にはこのような洞窟が36カ所あることが判明した。現在は、5カ所が観光として公開されている。面積は5千余から1万余平方メートルのものであるそうだ。つくられた年代は、春秋時代から前漢時代といわれている。何の目的で誰がつくったのかは、まったくわからない。まさに千年の不思議である。8番目の世界不思議だといわれている。

空海一行は、江山から杭州まで川を下ったと結論している。川の名前は上流から下流に向かって3通りに分かれる。江山から桐廬までを七里灘と呼び、桐廬から富陽までを富春江といい、富陽から杭州までを銭塘江と呼ぶ。

実は、ここ「小三峡」の川下りは1984年、私がチャーター船で初めて下ったのである。船のなかで食事をしながら、ゆったりした気持ちで下った。以降5回、独占の船旅を楽しんだ。私たちだけの景色であった。

ところが、前回2年前の訪問時に驚いた。まったく目を疑った。この「小三峡」の所々に立派な船着場ができ、上下する観光船が行き交っていたのである。変化する中国現代の観光に目を見張った。今回は、船のなかでは食事もない。川を汚すからと、船中での食事はできなくなったようだ。

船を下り、バスで杭州市へ向かった。最終日は霊隠寺を参拝して、杭州空港から関西空港へと帰国した。